

徳島平和ミュージアムプロジェクト

このプロジェクトでは、日米両国間の友情の人形交換とその後続く戦争の時代について紹介する展示を中心に、各種の事業を展開します。戦後65年の今、改めて平和の大切さを考える糧としてほしいと願っています。



ギュリック
(横浜人形の家提供)

人形が結んだ友情

1920年代、移民問題を中心として日本とアメリカの溝が深まりました。その状況に胸を痛めた宣教師シドニー・レイス・ギュリック(1860～1945)が中心となり、ひな祭りにあわせて日本へ人形を贈る計画がたてられました。そして、全米48州から集められた約12,000体の「青い目の人形」が友情と平和の使者として、送り出されていったのです。1927年(昭和2)、到着した人形は全国に配られ、人気者になりました。徳島県では現在、アリスという名の人形が1体だけ残っています。四国の他県では、香川県、高知県にそれぞれ1体、愛媛県に5体残っています。

人形の受け入れの中心となったのは、実業家・社会事業家だった渋沢栄一(1840～1931)でした。また渋沢がまとめ役となり、「青い目の人形」のお礼として58体の答礼人形が用意されました。これらの人形は、クリスマスに間に合うようアメリカへ送られていき、大歓迎を受けました。今回、約20年ぶりに里帰りする「ミス徳島」もその1体でした。



渋沢 栄一
(渋沢史料館提供)

戦争とくらし

1930年代に入ると、日本は中国との間で戦争を始めました。そして1941年(昭和16)には、アメリカやイギリスなども戦うことになりました。

戦争のもとで、人々は苦しい生活を強いられました。働き手となる若い男性の多くが戦場へ送られ、中学生らが労働力を補いました。また、生活に必要な品物が自由に買えなくなりました。

戦況がきびしくなる中、1944年(昭和19)末頃から日本本土は、アメリカ軍の空襲を受けるようになりました。1945年(昭和20)には東京や名古屋、大阪などの大都市や地方都市への大規模な爆撃が行われ、7月4日には徳島市街地も空襲を受けました。大量の焼夷弾で焼かれた街は、約60%が焼け野原になってしまいました。

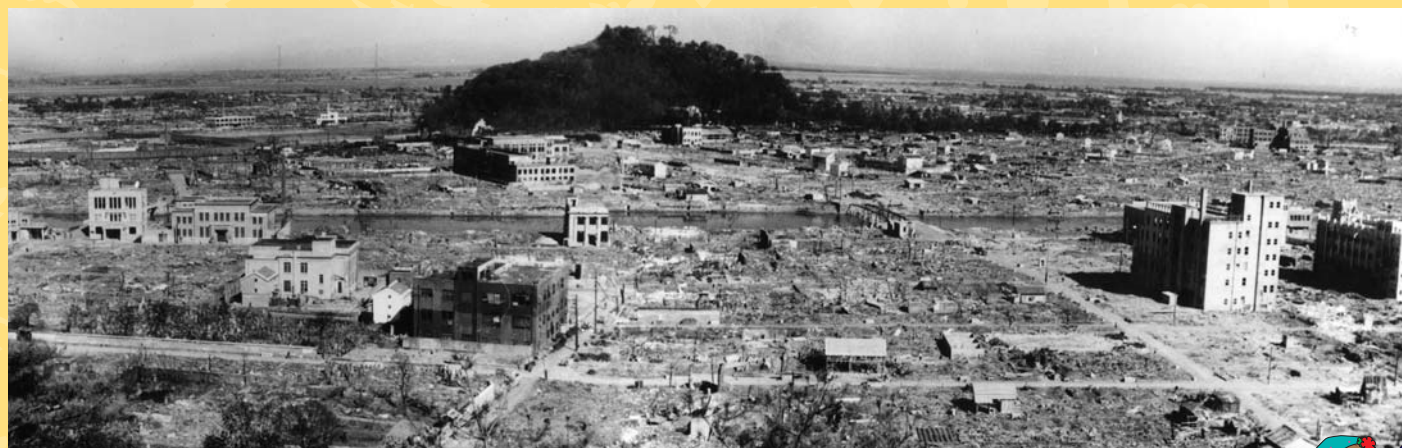


空襲後の徳島市街[上から南佐古、寺町、東新町]
(『写真集・徳島大空襲』より)

戦争と人形たち

戦争の間、「青い目の人形」は敵国の人形として扱われ、多くが失われてしまいました。それでも、「人形に罪はない」と考えた人々によって密かに守られたものもありました。今日知られている「青い目の人形」は、そうした歴史をくぐり抜けてきたものです。また、アメリカに贈られた答礼人形も、市民の目に触れる所から隠されたり、忌まわしく見られたりしたようです。そして、多くが忘れられてしまいました。

そのようないきさつを踏まえると、今に伝わる「青い目の人形」と答礼人形は、貴重な歴史の証人といつてよいのです。



眉山から撮影された空襲後の徳島市街(『写真集・徳島大空襲』より)

